ISSN 0914-3157

ほんのしるべ

書標

2024.
4月号

2024年4月5日発行（毎月1回5日発行）
通巻544号　昭和61年7月15日第三種郵便物認可

世界の本屋さん
vol.147

ルーマニア　ブカレスト
リブマグ書店

ノセ事務所　能勢　仁

ルーマニアの首都ブカレストはチャウシェスク独裁政権の時代もあったが、今は彼の巨大宮殿は「国民の館」と名前を変えて観光名所になり、上・下院の国会議事堂や美術館も入っている。ブカレストはブカレスト大学の街でもある。世界一美しい書店と言われる「カルトゥレシティ書店」（vol.80にて紹介済）も人気の店である。

事ほどさように書店の多い街である。大学周辺に約三十店、そして学生の利用する古書店も同じくらいある。すべて路面店なので利用し易い。ブカレスト大学近くに大学広場があるが、この周辺が書店街である。しかし神保町とは違い、今は書店の少なくなった水道橋界隈に似ている。

リブマグ書店は一言で言って冷たい書店である。ウィンドウからして我楽多屋を印象づけてしまう。店内は放任主義で何の案内も見出しもない。これまで経験したことのない店内の印象である。勝手に棚を作り、ルールなく陳列台を配置している。ルールがあるとすれば全商品の展示が面展示であることだろう。八段の壁面棚の最上段の本は日本人には手が届かない。本の分類は読者に委ねられている。本以外にマグカップの販売が目立っていた。レジ、店員は奥のほうに隠れる如くに存在した。夢をみている様な書店であった。

（表紙題字・陳舜臣）

「書標」歳時記　4月

やわらかな四月の風が、張りつめた冬の大気を、季節に耐えた人々の気持ちを、ゆっくりとほぐしていく。太陽のぬくもりで、春の気配で、たとえたまゆらでも人は幸福を感じることができるのはなぜなのだろう。

星野道夫『旅をする木』（文春文庫）より

もくじ

世界の本屋さん　147
「書標」歳時記〈4月〉　1
著書を語る㉓　○△□で作るカラフルな世界　秋山　美歩　2
書標・書評　『好きよ、トウモロコシ。』ほか　4
特集　記憶をつなぐ　聞き書きの地平　6
豊潤な仏教の世界　10
今月のおすすめ
コンピュータ　15　自然科学　16
医学書　17　社会科学　18
人文科学　20　文学・文芸　21
文庫・新書　22　芸術　23
実用書　24　地図・旅行書　24
語学・辞典　25　児童書　26
読者から　27
インフォメーション
本屋うらばなし　ある本屋の三月　30

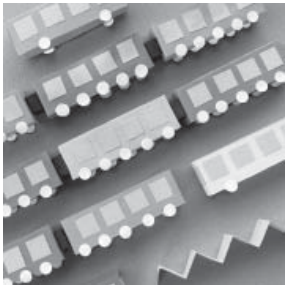
※表示価格はすべて税込み価格です。

○△□で作るカラフルな世界

秋山　美歩

ワークショップなどで子どもたちに「紙で電車を作ろう」というと、「難しすぎるよ。出来ないよ。」と言われてしまうのですが、「○△□の紙を組み合わせて電車は作れるかな」とよびかけると、あっという間に平面や立体の電車が出来上がります。

長方形の紙を車体にして、そこへ小さな正方形を貼って窓を作り、丸は車輪に。



電車
トンネルやビルの作り方も掲載。立体的な街を作って電車を走らせて。

「他のものも作ることができる?」

○△□に切られた紙を縦にしたり横にしたりして眺めているうちに、それは動物の手足や耳になったり、建物になったり、タイヤになったり、色々なものの形が見えてきて無限にアイデアが浮かびます。

犬
耳は△で。頭や鼻は○を半分に切ったものを組み合わせて作る。

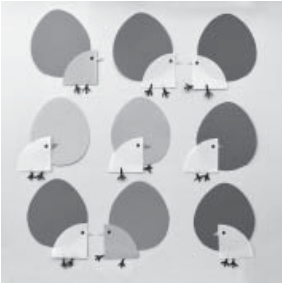
日常の三次元の世界で見ているものを○△□の形で表現するという行為（見立て遊び）は、子どもの遊びの中にたくさん見つけることができます。

例えば保育園や幼稚園での「手遊び」では、親指と人差し指で丸を作り、両手でそれぞれ作った丸を両目の前にかざせば「めがね」が出来ます。両手で四角を作れば「お弁当箱」、三角なら「おにぎり」に。

子どもたちの大好きな折り紙もこうした「見立て遊び」の一つだと私は考えています。「つる」の折り紙も鶴という鳥のリアルな形を表現しているというよりは三角の平らな部分を羽に、尖った長い棒状の部分を首に見立てて「つるに見える形」をシンプルに表現するものです。

決まった形のパーツを組み合わせてものを作るレゴ®ブロックやタングラムパズルなどはもちろんこういった「見立て遊び」の代表選手です。

造形活動も「見立て遊び」からスタートすれば、お絵かきや手作業に苦手を感じている子どもも取り組みやすく、「使うのは○△□だけ」と限定することで「うまく描けるかな？　作れるかな？」というプレッシャーからも解放され、子どもの作業が進みやすくなるという利点もあります。



ひよこ
ひよこは○を４つに切り分けて作る。たくさん作って仲間を増やして。

本書は、文字を書いたり描くことが少し苦手だった幼い我が子と、市販のタングラムパズルよりも簡単な図形遊びはないかなあ、と折り紙を切って動物を作って遊んだことから発想を得て製作しました。

使用する素材を折り紙にしたのは、たくさんの美しい色が子どもたちの発想をより豊かにしてくれることと、どこでも手に入りやすくハサミで切るのが簡単な素材を使いたいという気持ちからです。

本書では身の回りの動植物、昆虫・乗り物・建物を○△□だけで作る方法を細かな写真付きのプロセスで説明し、またそれらの作品の組み合わせ例（牧場や町など）も掲載しています。

○△□を使って電車のような複雑な形をシンプルな図形に落とし込んだり、逆に小さな○△□を集めて大きくて複雑な形を描いたりを繰り返すことで、ものの形を大まかに捉える力（空間認知能力）や描く力（表現力）を楽しみながら高めてもらえたらと思います。

また本書の作品をヒントに、折り紙の素敵な色を活かしてオリジナルの作品をたくさん作ってみてください。みなさんの作品をワークショップやインターネット上で見せていただくことが今からとても楽しみです。

『○△□で作る紙工作』
講談社・1,320 円（税込）

書標・書評

『好きよ、トウモロコシ。』

中前結花著　hayaoki books・一六五〇円

この本は昨春発刊され、私のSNSのタイムラインではこの本を入手できた喜びと帰宅してからの読書を楽しみにしている、という投稿がチラホラと見受けられた。そんなにいいものかと読んでみたら良かった、とにかく良かった。また一人素晴らしい文章を書く人を知ってしまった。この一年のうち度々読み返したが、読むたびに感情が揺さぶられ、そしてしみじみと春が似合うエッセイ集だと思うのだ。満を持して中前結花さんの文章を春に紹介できる事がとてもうれしい。

日常の愛おしさを再認識させてくれる話が綴られており、上京の話や恋の話、住んでいた町の話やプロポーズの話などあるが、どれもくすぐられる様な切なさを含んだ文章でしばしば涙腺を刺激される。特にお母さまとの関係はとても美しく感情が揺さぶられるので、自宅で読むことをお勧めしたい。何かが始まる話と何かが終わる話が多く含まれているところが、別れと出発の春に似合う所以だと思う。

本書に収録されている「プールの底で考え中」と書名にもなっている「好きよ、トウモロコシ。」の二作は名作だ。おそらく年を重ねれば重ねるだけより切なく愛おしい感情に包まれるのではないかと思う。また二本目の「赤に光る回鍋肉」という作品が個人的なおススメ。一本目の流れからは予想がしにくい流れで編集の妙もあるかとは思うが、この作家さんは凄く上手い‼　そして多分まだ傷は癒えきってはいないのかも知れない、と思っている。

（豪）

『朱子学入門』

垣内景子著　ミネルヴァ書房・二七五〇円

緻密に体系化された朱子学は、その全体像を網羅的に解説するだけでも入門書を超えるレベルとなる。そこで本書は朱子学を心の学問「人の心はいかにすれば安楽になるかを求めた学問」という側面からアプローチしようと試みる。

本書の目次を見てみよう。「仏教なんてぶっとばせ（朱子学の位置）」「気のせいって何のせい？（朱子学の世界観）」……良い意味で本当に朱子学を解説した本なのかと疑いたくなるような項目が並ぶ。しかし、騙されたと思って読んでみて欲しい。教科書的に朱子学を代表する用語といえば「性即理」である。そもそもここで朱子学が指す「性」「理」という語も抽象的でなかなかわかりにくいものだ。しかし、これらの語は現代日本人の感覚とは同じではないのだけれども、まったく違うというわけでもないというところが曲者である。「性」とは何か？「理」とは何か？……その答えに「気のせいって何のせい？」から語り起こされ、心の学問というテーマと接続されていく朱子学の世界観の解説は秀逸である。「あるがまま」の姿と「あるべき」かたちの狭間で揺れ動く人の心を安んずるために導き出した朱子の答え。自己満足と自暴自棄を強く戒め、ときに惑い、立ち止まりながらも、人の善なる本性を信じて「功夫」重ねることを説く姿は、儒学者が難しい顔をしながら説教をするようなものとは違う。

本書の姉妹編『朱子学のおもてなし』（二〇二一年、ミネルヴァ書房・二四二〇円）も併せて読みたい。

（仙）

『ハッピークラシー』

エドガー・カバナス他著　みすず書房・三七四〇円

なんだか、パンドラの箱を開けてしまったような気分になった。幸せを追求すること、ハッピーでいること、自分の感情、とりわけネガティブな感情を律すること、アンガーマネジメント、ポジティブに物事を捉えること、何事にも前向きに取り組んで、めげずに立ち直ること。現代社会では、そういう超人のような理想像が良い人間として描かれることがある。そしてその理想像はいつしか、元来その人が持っている性質を飲み込んでいき、「ポジティブ」に染まっていく。

本書は、九〇年代に創設された「ポジティブ心理学」への批判の書である。いまや社会、政治、経済において人々の「幸せ」が重要議題として取り上げられるようになった。本来であれば「幸せ」は計測できないものと思われるが、「ポジティブ心理学」の登場によりそれは計測可能で、個人が追求すべき目的であるとされた。「ポジティブ心理学」がどのように生まれ、広まり、社会に浸透していったかを読んでいると、これまで感じていたが言語化できなかった矛盾の正体を見たような気がした。

現代社会において、自分の感情すらコントロール可能なもの、つまり自分のものになるという幻想を抱き、それができないと未熟であるというような風潮が蔓延しているように感じる。人は皆幸せになるために生きていると思うが、その幸せ像を一方的に定義し、そこから外れることを許さないような、そんな場所で目指す「幸せ」は本当に幸せなんだろうか。足元がぐらつくような一冊だった。（岡）

『「まちライブラリー」の研究』

礒井純充著　みすず書房・二八六〇円

森ビルで推進していた「六本木アカデミーヒルズ」の夢破れた礒井純充が、自分が本当は何をやりたいのかを徹底的に考え、悩んだ末に、提唱、実践していったまちライブラリーは、試行錯誤の中で成功や失敗を繰り返し、今では全都道府県、一千ヶ所以上で展開されている。

「蔵書を活用して、生活空間の任意の場所に本を置き、その場所を私設の図書館にする」、まちライブラリーの定義はそれだけだ。資本も資格も不要で、誰でも始められる。大学や企業、公共の建物の中にも、商店や飲食店の一角にも、自宅の前に置かれたたった一つの箱の中にもまちライブラリーがある。本に関係する活動や場づくりをやりたいと思った人が、誰でもどこでもやれることを目指した。

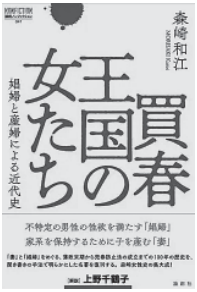
運営の規則は、できるだけつくらないようにした方が良い。規則をつくることは、その場所がみんなの場所ではないことの宣言だからだ。また、イベントで集客や収益を目指すよりも、日常的に人が集まり本を借りていく風景、そこでの人の出会いが大事なのだ。ある運営者は、「本を片手に話していることがまちライブラリーだと気づいたんです」と言う。「街のため、人びとのため」と意気込むよりも、自己課題を乗り越えるために始めた人の方が、うまくいきやすいらしい。

まちライブラリーの実践と研究を通じて礒井は、現代の最大の課題は、社会全体に組織の視点が優先され、個々の人の視点が看過されているということだと確信した。礒井が本書で何より伝えたいのは、個人の活動こそが社会的な活動につながる可能性だという。

まったく、同感である。（フ）

二〇一五年、ベラルーシの作家、スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチさんにノーベル文学賞が授与されたのは比較的記憶に新しいところですが、その後、いろんな本を手に取っているうち、アレクシエーヴィチさんが用いたような「聞き書き」の方法をベースにした書物に出会う機会が、なんとなく多いなと思うようなことがありました。

日本では、もとより、藤本和子さんの『塩を食う女たち――聞書・北米の黒人女性』（岩波現代文庫・一一八八円）、石牟礼道子さんの『苦海浄土――わが水俣病』（新装版、講談社文庫・八三六円）、そして森崎和江さんの『まっくら――女坑夫からの聞き書き』（岩波文庫・八八〇円）といった作品に代表される、聞き書きの名著があります。わたしは、このお三方を勝手に聞き書きの「三大女王」と呼んでいるのですが（アレクシエーヴィチさんも含めると「四大女王」でしょうか）、それぞれの方の他の作品も重要なものばかりですので（藤本和子『ブルースだってただの唄――黒人女性の仕事と生活』（ちくま文庫・九九〇円）、石牟礼道子『椿の海の記』（河出文庫・九三五円）、森崎和江『買春王国の女たち――娼婦と産婦による近代史』（論創社・二六四〇円）など）、まずは何はともあれ、それらを手に取っていただき、そこに流れるさまざまな「声」に耳を澄ましていただければと思います。



『買春王国の女たち』

文学者の佐藤泉先生は、『思想』（二〇一九年第一一号）に掲載された「記録・フィクション・文学性――「聞き書き」の言葉について」において、韓国での従軍慰安婦の方々への「調査」のあり方の変遷について説明されるところで、こう述べていらっしゃいます。

当事者の語りを尊重するために、調査は「尋ねる」ことから「聞く」ことへと移行していくが、それと同時に――一見すると逆のベクトルのように見える

が――調査者の位置を可視化することも重視されるようになっている。……被害者たちの経験には最終的に汲み尽くせない奥行があり、それゆえどのように問うか、どのような相手に向かって話すのかによって証言は変わり得る。証言は聞き手と証言者との間に生まれるのであり……（証言者らが：引用者）深い沈黙に沈められてきた経験を語ることができるようになるためには、その声に真摯に耳を傾ける聞き手が現れること、そしてその間に時間をかけて築かれた信頼関係が成立していることが不可欠である。（『思想』二〇一九年第一一号、七一頁）

そしてそれをふまえ、

……聞き手がそこにいるということは、証言を可能にする条件であり、証言の内的成分でさえある。証言を聞く行為とは、単に受動的な行為でも、また語ることは付随する二次的な行為でもない。聞き手は、被害者の内側で凍りついた記憶を解かすように呼びかけ、自分自身の理解を凌駕する他者とのあいだに関係を創設し、証言の空間をそこに創り出す。（同、七一頁）

と、「聞き書き」の特徴とも言うべきものをまとめていらっしゃいます。

これを受け止めて言い換えてみると、以下のようなことになるでしょうか。「聞き書き」は、聞き手と語り手の協働作業を通じて「声」が生み出され、その作業のなかで語り手にとって重要な経験が想起され、そしてその作業を通じて聞き手は語り手とともに変容し、聞き手はその変容した自己をもって何がしかの作品を創り出し、それをほかの他者たちが受け取って「記憶」としてつながれていく※。佐藤先生の論考からこうしたことに気づかされて、先に紹介した「三大（四大）女王」の方々の作品が持つ意味を、少し深く自分自身で理解したような気がしました。

『思想』の佐藤先生の論文からも多くの示唆を得ることができますが、佐藤先生による著書『死政治の精神史――「聞き書き」と抵抗の文学』（青土社・三五二〇円）は、まさにアレクシエーヴィチさん、石牟礼道子さん、森崎和江さんの作品を扱い、そこで「文学」の新たな可能性が追求されていますので、ぜひ手に取って読んでいただきたいと思います。

『死政治の精神史』

先に「「聞き書き」の方法をベースにした書物に出会う機会が、なんとなく多いなと思う」と書きましたが、それは「オーラルヒストリー」が注目を集めていったことと関係があるかもしれません。

「聞き書き」と「オーラルヒストリー」、厳密に考えていくと、いろいろと位相が違う部分は多くあるでしょう。特に後者では、さまざまな方法論の模索が続いています。最近の書物では、大門正克先生の『語る歴史、聞く歴史――オーラル・ヒストリーの現場から』（岩波新書・一〇五六円）、朴沙羅先生の『記憶を語る、歴史を書く――オーラルヒストリーと社会調査』（有斐閣・二五三〇円）が代表的なものかと思います。前者は歴史学の

立場から、「語ることと聞くことの歴史の〈現場〉を検証する」（同書、ⅳ頁）ことを目的とし、後者は社会学の立場から、著者の苦しい経験から紡ぎだされた方法論と、大門先生の言う〈現場〉が描かれている作品だと思います。そして、それらもふまえて読むべき名著として、残念ながら若くして亡くなられてしまった保苅実先生の『ラディカル・オーラルヒストリー――オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』（岩波現代文庫・一八四八円）があります。ここでは先に挙げた「聞き書き」の特徴の多くを高いレベルで観取できるのではないかと思います。

保苅先生の著書が学問的な「聞き書き／オーラルヒストリー」の重要成果だとすると、近年、「三大女王」の作品に続くような書物が、現代の女性の書き手（聞き手）によって多く刊行されてきているように感じます。

佐藤泉先生は先に挙げた論考のなかで、「聞き書き、記録の言葉は、すべての生の悲惨、生の輝きが他のものと交換可能な一般的等価物におきかえられてしまうことに抗し、言語の生成する現場に言語そのものを立ちかえらせようとする。そのただ中で、言葉は詩的言語の響きを湛えはじめるのだ」（『思想』二〇一九年第一一号、七四頁）と指摘したうえで、石牟礼道子さん、アレクシエーヴィチさん、森崎和江さんの営為を引き、こう述べられています。

地上で流通する交換可能の言葉ではなく、支配的な価値と馴れ合い、決して出来事に触れることのない言葉ではなく、ある場合には伝達の道具となった言葉にかき消され、ある場合にはそれを凌駕する聞き書きの言葉、聞き＝書く言葉、受動ともいえず、能動ともいえない言葉の共鳴の中に、言語の詩的な次元がふと立ち現れる。それは言葉をその生成の場に立ちかえらせ、言葉を通して世界を再び回復させるのだ。こうした言葉の稀少な質を、記録とフィクションの二分法に先立つ「文学性」と呼んでよいと思う。（『思想』二〇一九年第一一号、七四―七五頁）

ここで佐藤先生が言う「文学性」を持った書物として、瀬尾夏美さんの『声の地層――災禍と痛みを語ること』（生きのびるブックス・二三一〇円）と中村佑子さんの『わたしが誰かわからない――ヤングケアラーを探す旅』（医学書院・二二〇〇円）の二冊をご紹介したいと思います。

『声の地層』

瀬尾さんの著書は、二〇一一年の東日本大震災の被災地域を歩いて回って、日々話を聞いたことをベースに、各章が、それを一つひとつの「物語」として記述し、そのあとに「あとがたり」と名付けられた「おもに実際の語りの場の様子やそのときどきの気づきを記している」文章で構成されています。

このスタイルも新しい感じですが（「物語」部分は石牟礼さんの作品に通じるところがあるかもしれません）、特に「物語」とすることによって、「死者」の言葉も「聞

き書き」され、記録されるのが面白いところです。瀬尾さんは、「死者たちを語れないままの存在にしてしまうのではなく、彼らの声を聞きながら、生きている者たち同士で手を繋ぐことができたら。そのとき、いったいどんなことが起こるのだろう」（『声の地層』二九頁）と書かれています。また、震災後に生まれた若い「語り手」の言葉を受け止め、震災を知る聞き手として、記憶の継承というものにとても意を払っています。

ここで紹介したのはほんの一例ですが、ほかにも民話が織り込まれていたり、書物のタイトルどおり、さまざまな「声の地層」が現れ、また幾重にもいろんな出来事、連想される歴史的事象、瀬尾さん自身のアーティストとしての活動などが重なり合います。

『わたしが誰か
わからない』

もう一つ、中村佑子さんの著書は何とも不思議な感覚を呼び起こしてくれる書物です。中村さんご自身もお母さまも精神的な病を患われていて家族によるケアの当事者であり、本書も「精神疾患の家族をもつ人の話を聞いていこう。若いときからの家族の「精神」というブラックボックスに向き合ってきた、かつての子どもたちの話を。」（同書、三二頁）という目的があったのですが、読み進めていくと、そのプロセスの中で、中村さん自身がどんどん変わっていく、その変化の様と思考の深まりが見て取れるのです。個人的には、ここにも何か「聞き＝書く言葉、受動ともいえず、能動ともいえない言葉の共鳴の中に、言語の詩的な次元がふと立ち現れる」瞬間があるように感じています。

藤本和子さん、石牟礼道子さん、森崎和江さんといった「三大女王」が切り開いた「聞き書き」の地平は、いま学問の現場でも、人びとが日々生活を営む現場でも、多様な声が響きあいながら新たな姿を見せてくれているように思います。世界には、語ること、聞くことからしか表現しえないものがたくさんあります。そしてそれを記録する人たちは、そうした「声」に注意深く耳を傾け、その「語り」にある時は寄り添い、ある時は強い衝撃を受けて自己が変容し、その人はさらに深く記憶をつないでいく媒介者になってくれるでしょう。そしてここで紹介したような、その記憶が書きつけられた書物も重要な媒介者の役割を果たすのだと、出版社の者としては「頑張らねば」とひそかに思っています。

（勁草書房・黒田拓也）

※この特徴については、筆者と青山和佳先生との対話の中でより明確になってきました。ここでの記述は青山先生による表現に負っています。

＊愛書家の楽園・特集「記憶をつなぐ　聞き書きの地平」でご紹介した書籍は、ジュンク堂書店池袋本店一階エレベータ前、三宮店五階、高松店レジ前と福岡店一階、丸善京都本店地下二階と岐阜店入口にて、四月十日～五月九日までフェア展開中です。

豊潤な仏教の世界

花祭りをご存知ですか。灌仏会（かんぶつえ）とも呼ばれ、お釈迦様の誕生日である四月八日にお祝いをする仏教の行事です。お釈迦様の誕生を祝い、子どもの身体健全、所願成就を祈ります。日本各地の寺院で、参拝者が「誕生仏（釈迦像）」に甘茶をかけたり、子どもたちを仏に仕える身として行列となって歩く稚児行列が行われたりします。今回は、花祭りにちなんで仏教に関する本を紹介します。

ブッダ

仏教はおよそ二千五百年前に誕生しました。その創始者は釈迦、釈尊、ブッダなどと呼ばれています。実はこれらはいずれも名前ではなく尊称です。お釈迦様の釈迦とは、その出身部族である釈迦族（シャーキヤ族）のことを指しており、釈尊とは釈迦族の尊者を表しています。ブッダとは悟りを開いた人のことを指します。本名はゴータマ・シッダールタと言い、シャーキヤ族の王族として生まれ、結婚し男子をもうけましたが、二十九歳で地位を捨てて、修行をした後に悟りを開いて、生涯を布教の旅に費やしました。ブッダについて書かれた本は多くありますが、ここでは描き方の異なる二冊を紹介します。

『ブッダ　1』

手塚治虫『ブッダ』全十四巻（潮出版社・各六三〇円）

シッタルダ（ブッダ）の生涯を描いた壮大な大河ドラマです。手塚本人が「お釈迦様の伝記をかりた、まったくのフィクション」と言っているように、実在しないキャラクターが多数登場し、仏典にある人物でもすっかり違うキャラクターになっているものも多く出ており、著者独自の解釈も入っています。しかし、カースト制度など当時のインドの社会状況が独自キャラクターの登場によって丁寧に描かれており、シッタルダの苦悩や出家の経緯、ブッダとしての葛藤を感じることができます。偶像としてのブッダではなく、人間としてのブッダが

感じられます。史実と異なる点が多くありますが、仏教関係者からも評価が高い本です。

『ブッダ伝
生涯と思想』

中村元『ブッダ伝　生涯と思想』（角川ソフィア文庫・一一〇〇円）

一九一二年生まれの著者は日本で最も有名な仏教研究者の一人で、サンスクリット語やパーリ語に精通して、初期仏教の経典の翻訳や解説など数多くの著作を残しています。ブッダは、その存在の大きさ故に死後に様々な伝説が加えられており、史実としてのブッダがどのような人物であったのかわからない部分も多く残っています。本書は、著者の初期仏教研究に基づいて、実在のブッダの生涯と思想に迫ろうとする一冊です。

ブッダの説いた教えは、死後になって徐々に経典にまとめられていきました。初期の頃に成立した経典で有名なものとして「スッタニパータ」や「ダンマパダ」があります。

中村元『〈仏典をよむ〉1　ブッダの生涯』（岩波現代文庫・一一二二円）

中村元『〈仏典をよむ〉2　真理のことば』（岩波現代文庫・一一〇〇円）

NHKラジオでの連続講義を活字化したもので、耳で聞いて分かるように解説されていることから、一般読者にとっても分かりやすくなっています。原典の翻訳とその解説で構成されています。

『〈仏典をよむ〉1
ブッダの生涯』

中村元訳『ブッダのことば　スッタニパータ』（岩波文庫・一三五三円）

中村元訳『ブッダの真理のことば　感興のことば』（岩波文庫・一二一〇円）

こちらは完訳版です。訳文とほぼ同じ量の訳注がついており、解説書にもなっています。インドでは同じ節回しを何度も繰り返すことが多くそのままでは読み通すのが大変ですが、一度挑戦してみてはいかがでしょうか。

仏教史

仏教はインドで誕生しましたが、ブッダの死後に解釈を巡って分裂していきます。まずは、保守的な上座部と革新的な大衆部に分裂し、さらに二つの部派は分裂を繰り返して二十ほどの部派へと分裂する部派仏教の時代を迎えます。さらにこれらの上座部仏教とは異なる新たな仏教である大乗仏教が紀元前後に生まれます。また大乗仏教後期には、密教が生まれ、ヒンドゥー教と習合して独自の教義を確立しました。インドの国外へは主に三つのルートで広がっていきました。北東へ進んだのが、中国を経由して朝鮮、日本へと伝わった北伝ルートです。南伝ルートは南東へと広がり、スリランカ、東南アジアへと伝わりました。北西へのルートでは、ヒマラヤ山脈を越えてチベットへも伝わりました。

平川彰『インド仏教史　上・下』（春秋社・各三五二〇円）

上巻では、仏教の成立から原始仏教、部派仏教、初期大乗仏教までを扱い、下巻では、後期大乗仏教から密教、仏教の滅亡までを扱います。古代インドの地図もついており、インドにおける仏教の流れを知ることができます。

『インド仏教史　上巻』

インドでは、支配層であるバラモン教の権威を認めない自由思想家たちが現れました。ブッダもそのうちの一人で、後に仏教側から他の自由思想家たちは六師外道と呼ばれるようになりました。

赤松明彦『インド哲学10講』（岩波新書・九九〇円）

本書では二千年にわたる思索の軌跡について原典を踏まえながら読み解きます。難解な部分も少なくはないのですが、仏教の周辺を知ることができます。

インドからやがて中国へと仏教は伝わります。中国の文化や政治と交わることによって、仏教は新たな展開を迎えます。訳経僧たちによって経典が漢訳され、また中国独自の経典も創り出されました。

石井公成『東アジア仏教史』（岩波新書・一〇七八円）では、東アジアにおける二千年にわたる歴史をとらえます。経典の誕生、漢訳、伝播の歴史をまとめたのが、水野弘元『経典はいかに伝わったか』（佼成出版社・一九八〇円）です。漢訳の歴史を見ると経典の多種多彩な様に驚かされます。

『東アジア仏教史』

仏教の多様化

仏教のことを一言で表すのは大変です。時間の面では、ブッダが生きていた時代、初期の頃の原始仏教の時代、部派仏教の時代、大乗仏教成立後の時代など、その時期によって仏教の姿は大きく異なります。また、仏教はインドから広がっていき、上座部仏教が伝わった東南アジア、密教が伝わったチベット、大乗仏教が伝わった東アジアというように地域によっても仏教の姿は大きく異なります。

平岡聡『なぜ仏教は多様化するのか』（大法輪閣・二五三〇円）

キリスト教の聖書は一冊に収まるのに対して仏教の経典は数十巻にも及び、その内容も多種多様です。本書では、他宗教に比べて仏教が群を抜いて多様化している理由を「進化論」を援用して解明していきます。言葉が持つ性質と仏教史の中の仏典の解釈に変化の要因を求め、インド、中国、日本における多様化の実例を紐解きます。

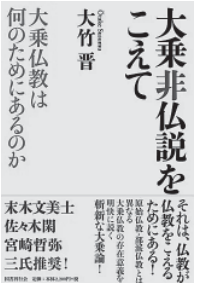
仏教はしばしばキリスト教やイスラム教などの一神教と対比して語られます。ブッダ（仏）とは一般にはゴータマ・シッダールタのことを指しますが、もともとは悟った人という意味なので、ブッダは

他にも存在します。浄土教に説かれている西方浄土の阿弥陀仏はその一例です。「ブッダたち」とブッダを複数形で言えることが多様性の一因と言えます。並川孝儀『ブッダたちの仏教』（ちくま新書・八三六円）では、様々なブッダとそれぞれの教えを核にして仏教の歴史像に迫ります。

『仏教、本当の教え』

植木雅俊『仏教、本当の教え　インド、中国、日本の理解と誤解』（中公新書・八八〇円）

著者は漢訳からではなくサンスクリット原典から『法華経』や『維摩経』を現代語訳するほどサンスクリット語に精通しています。中国や日本では漢訳仏典が用いられ、サンスクリットの原典はほとんど顧みられていません。本書は、インド仏教の姿、中国や日本での仏教の受容と変化をサンスクリットと漢訳仏典を比較することによって読み解いた日中印の比較文化論です。翻訳書は『法華経　サンスクリット原典現代語訳　上・下』（岩波書店・各二七五〇円）、『維摩経　サンスクリット版全訳　現代語訳』（角川ソフィア文庫・一二七六円）で読むことができます。



『大乗非仏説をこえて』

大竹晋『大乗非仏説をこえて』（国書刊行会・二四二〇円）

上座部の経典のみがブッダの本当の説法をつたえるもので、大乗の経典は仏滅後四、五百年頃に誰かが作り出した偽経であると非難する説が大乗非仏説です。日本仏教にとってはまことに都合の悪い説で、日本仏教界もあまり正面から向き合わない問題です。本書では、恥部ともいえる問題に正面から向き合い、大乗仏教の存在意義を求めます。

日本仏教

日本には様々な宗派がありますが、寺院の数でみると鎌倉時代に誕生した宗派が大多数を占めています。鎌倉時代には栄西、道元、法然、親鸞、日蓮など祖師と呼ばれる僧も現れ、日本仏教が大きく展開した時代となりました。

菊地大樹『吾妻鏡と鎌倉の仏教』（吉川弘文館・二七五〇円）では、鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』から鎌倉の仏教を読み解きます。祖師たちの思想面ではなく歴史書から仏教を見ることで、当時の政権や鎌倉という都市など仏教をとりまく姿が浮かび上がります。

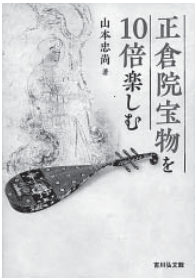
日本仏教は旧態依然とした旧仏教に対して鎌倉時代に誕生した新仏教が中心であるとする考え方が今でも一般に広く受け入れられています。今日ではこの見方は批判され、鎌倉時代においても旧仏教は創造的な役割を果たしていたことが分かっており、また鎌倉時代の仏教だけが重要ではないことも明らかにされています。旧仏教という呼称についても疑問が

提起されています。また、日本仏教を語るときに宗派別に開祖、お経、教理を解説することが多いですが、宗派が確立するのは近世になってからで、その原型も中世の後半以降であり、それ以前はもっと流動的でした。末木文美士『日本仏教入門』（角川選書・一九八〇円）は、仏教学の立場から思想史を研究してきた著者が、日本仏教研究の方法論、歴史における日本仏教の受容、浸透、展開に分けて、日本仏教の全体像を捉え直そうとする一冊です。最新の研究に基づきながら従来の常識を批判し、広い視野で日本仏教を見直そうとします。末木文美士『日本仏教史　思想史としてのアプローチ』（新潮文庫・八八〇円）も同じ姿勢で思想史から日本仏教の歴史を見る一冊です。どちらの本も日本仏教をダイナミックに捉えることができます。

仏教芸術

経典以外のものも仏教が広がる上で重要な役割を担いました。

仏教がガンダーラ地方などに伝わると仏像が盛んに造られるようになりました。経典や宗派の違いによって祀られる仏像は異なります。大角修・監修『語れるようになる仏像のみかた』（成美堂出版・一五四〇円）では、仏像の種類や姿の意味などが写真で解説されており、仏像の基礎知識、楽しみ方を知ることができます。山本勉・武笠朗『鎌倉時代仏師列伝』（吉川弘文館・二七五〇円）では、京都・奈良・鎌倉などに仏像を残した三十九名の仏師が取り上げられ、運慶派（慶派）、快慶派、院派、円派などそれぞれの作風の特徴を図版で解説しています。仏像と仏師の両方を知ることで、寺院で見る仏像の見え方が変わってくるかもしれません。



『正倉院宝物を10倍楽しむ』

正倉院には西域や中国から伝わった様々な宝物が収められています。仏教関係でも、数珠や袈裟、花籠、香炉など多くのものがあります。山本忠尚『正倉院宝物を10倍楽しむ』（吉川弘文館・二九七〇円）では、正倉院宝物の知られざる一面を知ることができます。「正倉院は代用品の宝庫である」「正倉院は空想動物園である」「正倉院鏡はかなり特異である」という第一章から三章までの章題を見ても興味を惹かれます。

石川九楊『名僧の書　歴史をつくった50人』（淡交社・二七五〇円）

書家が五十人の僧の書を読みます。どのくらい筆尖が深く紙を捉えているかという深度、どのくらいの速さで筆尖が紙の上を進んでいるかという速度、どんな角度で筆が紙に対しつつ動いているかという角度。三つの方向から一点一画がどのように書かれているかをなぞって触覚的に追体験することによって、名僧の書の解読を試みます。教えや教理とはまた異なる僧の一面をうかがうことができる面白い一冊です。

知っているようでよく知らない仏教。知れば知るほどにその奥行の深さを感じます。

（MARUZEN&ジュンク堂書店梅田店・藤井啓昌）

今月のおすすめ　コンピュータ

ハッキング・ラボのつくりかた 完全版

IPUSIRON著　セキュリティやハッキングなどに関する著書、翻訳書を多数手掛けているIPUSIRON氏。その代表作である『ハッキング・ラボのつくりかた』が五年ぶりに改訂、完全版として刊行された。前作を踏襲しつつ内容に深みを増したという、一〇〇〇ページ超の大作だ。書名に冠している「ラボ」とは「実験室」のこと。本書では仮想化技術を用いて、手元のPCに攻撃用とターゲット用、双方の端末を作成し、その環境内でハッキング実験を行う。ネットワーク盗聴や遠隔操作など、ハッキングにも様々な種類がある中、本書が主に取り上げているのはサーバー侵入。「管理者権限の奪取」というゴールの達成感は初学者、上級者を問わない。また、攻撃アプローチの繰り返しの実践が技術者としての自信につながる。実験に使用される端末やネットワークは仮想環境内にあるため、壊れるほど触っても問題は無く、誤操作による外部への悪影響を避けられる。攻撃者としての体験を通してセキュリティへの確かな知見を得られる一冊だ。

翔泳社　六八二〇円

実務で使えるメール技術の教科書

増井敏克著　本書では、メールで使われている技術を軸として、その送受信のしくみやメールサーバーの構築・運用、セキュリティに関する知識が総合的に解説されている。現在、個人や企業間のコミュニケーションの場面では各種SNSやWeb会議の利用が増加している。しかし、アカウントの作成や初対面でのやりとりに使用したりなど、それぞれの場面でのメールの重要性は依然として変わらない。また、セキュリティの面においては、メール本文や通信の暗号化、認証の方法は進化を続けている。Webサイトの運営、企業の情報システムを担当するエンジニアにとって、メール技術への理解は必須のものなのだ。それらが一冊にまとめられた書籍は数少ないといわれる中、本書で学び得た事柄は実務の現場で必ずや活きるであろう。

翔泳社　二六一八円

CODE 第2版

チャールズ・ペゾルド著　酒匂　寛訳

長く入手困難だった古典的名著が、改訂版で復活。「コードから見たコンピュータのからくり」という副題どおり、モールス信号やバーコードなどシンプルなコードについて学ぶところからはじめ、より複雑なコードの複合体であるコンピュータの理解を目指す構成。CPUについての解説が大幅に追加されたほか、本文中に登場する回路図が動作する様子をウェブサイトで確認できるなど、初版から二十年という時間経過に合わせて、本書の内容も格段にアップデートされている。

日経BP　五〇六〇円

今月のおすすめ　自然科学

奄美でハブを40年研究してきました。

服部正策著

いきなりであるが、奄美は沖縄県ではなく鹿児島県にある。

当たり前なこと、という方は素晴らしい。そうだったのかと膝を打ったあなた、そうなのです。そんなあなたにも読んで欲しいこの一冊。

本書を読めば奄美の生き物や生活がぐんと親しく感じられ、ひいては環境や自然について考えるきっかけとなるかも。

水先案内人はタイトルにもある通り、奄美でハブを四十年研究してきた服部先生。内容はハブの生態から研究をするための試行錯誤、そしてニッチなおすすめスポットまで、目からウロコがボロボロ落ちてページを繰る手が止まらない。

読み終えたあとに残るは興奮の名残と、長年暮らしてもまだ未知の部分がある奥深い自然への感嘆。春のお供にぜひ！

新潮社　一七六〇円

国産ロケットの父 糸川英夫のイノベーション

田中猪夫著

小惑星にその名を冠する糸川英夫は、日本におけるロケット開発の父である。二〇センチほどのおもちゃのような、ペンシルロケットが有名だ。それ以前に九七式・隼（はやぶさ）・鍾馗（しょうき）といった戦闘機の設計に係わった人物でもある。プロペラが音速の邪魔になるなら取っ払えばいいと、ジェットエンジンまで研究した人物でもある。一転、終戦後にはバイオリンを研究したり、脳波記録装置を発明したりしていた。単なるロケット野郎ではないのである。

本書は革新的技術者糸川先生の伝記だ。「逆境は成長のルーツである」という柔軟な発想が読んでいて面白い。例えば当時の常識を覆す高性能翼を設計しているが、正攻法でそんな飛行機を作らせてもらえるはずがない。そこで同じ理論でプロペラ「だけ」を試作することで自論の正しさと性能を証明している。実際に常識に対する反逆が成功に繋がっているあたりがちょっとした企業小説のようだ。

日経ＢＰ　二二〇〇円

情報と建築学

デジタル技術は建築をどう拡張するか

／東京大学特別講義

池田靖史他編著

本書は、二〇二二年一〇月に東京大学で開催された建築情報学シンポジウムが元となっており、「建築学」を構成する構造や環境、計画や材料などの各分野が、今日の「情報化」によってどのように変化するのかを、シンポジウムに登壇した三十八名の教員が考察したものである。

例えば、「デジタルで見る日本の庭」の章では、チャールズ・ムーアが『庭園の詩学』（鹿島出版会、一九九五年）で分析しきれなかった日本の庭園様式の「ありよう」を、「近年飛躍的に発達しているレーザー測量による点群データ解析」をもって分析している。「木漏れ日」や「透かし剪定」は、「デザイン」できるものであるのだ、と。

旅館や病院の待合室から、「鳥のさえずりのＢＧＭ」が聞こえなくなる日は、そう遠くないのかもしれない。

学芸出版社　二九七〇円

今月のおすすめ 医学書

そうだったのか！ 精神科の病気

その人には何が起きていて、どうケアすると助けになるのか

中村　創著

例えば、あなたは統合失調症について、具体的な説明ができるだろうか？　どのような症状で、実際に身体の中で何が起きているのか。

本書は精神科看護師として患者をケアしてきた著者が自らの経験談を交えながら、統合失調症、うつ病、発達障害、認知症など精神科における主要な九つの疾患を解説する。経験談の中には患者さんとの関係をうまく築けずケアができなかったなどの失敗も含まれているが、同じ轍を踏まないでいられたらという著者の思いがある。精神科の疾患は生きづらさに直結するものばかりで、何気ないひとことや一般的と思われる言い回しが当事者に重く受け止められることもある。そういったエピソードも本書には掲載されているため、現在患者のケアをしていて似通った状況にある人にとって助けになるかもしれない。本書は精神疾患を持つ人を支える立場の人が適切なケアを行えるよう導いてくれる本であるが、同時に生きづらさを抱える人も手にとってもらいたい。「本書は、そうした生きづらさをかかえた方々の負担感が少しでも軽減される一助となることを願って書いています」と著者も述べている。自分を苦しめる病を理解することで、一人で抱えられるものなのか、そうでないなら適切なケアを受ける機会を得るきっかけとなる本ではないだろうか。

医学書院　二二〇〇円

アンエイジング

ロバート・P・フリードランド著
田平　武訳

あなたは健康で長生きする秘訣と言われると、運動や心の健康を想像するだろう。著者はそれらも大事であると肯定した上で、実は四つの鍵があると言う。身体的、認知的、心理的、社会的な予備能（リザーブ）である。これらは困難に直面しても身体のシステムのバランスを維持し、健康、特に老いにおいて重要な因子である。

本書では、四つの予備能がどのように健康や老いに影響しているのか、またどのようにそれを維持するのかを解説し、我々がどうすべきなのか確固たる指針を示している。随所にちりばめられた古今の名言や逸話も見どころ。「老いは避けられないものではなく、チャンスである」読む人の心に残る一冊となるだろう。

診断と治療社　三九六〇円

今月のおすすめ

社会科学

戦争とロジスティクス

石津朋之著

昨今ビジネスにおいて「物流」は競争の要である。その「物流」を円滑に行うために必要不可欠な「ロジスティクス」という概念は、そもそも軍事業務の「補給」「輸送」「管理」という、戦闘地帯へ後方から必要な物資や兵員を配置するといった活動全般を指す「兵站」という言葉から用いられたということをご存じだろうか。

軍事に「素人は「戦略」を語り、プロは「兵站」を語る」という言葉がある。優れた戦略を立て屈強な兵士を用いたとて、前線に充分な物資や兵員などの応援が行き届かなかったら、戦果をあげるどころか戦うことすらままならないのである。過去の戦いの結果をもとに、軍事におけるライフラインである「ロジスティクス」のこれからを考える一冊。

日経BP　二六四〇円

みんなの社会的処方

西　智弘編著

社会的処方と言われると内容についてピンとくる人は少ないかもしれないが、サブタイトル「人のつながりで元気になれる地域をつくる」と聞けば何について書かれているのかイメージしやすいかもしれない。地域のつながりが廃れている今、孤立せず誰もが元気に暮らす社会をどうやって作ることができるのか。

社会的処方とは誰か特定の人たちだけのものではなく、専門家だけのものでもない。社会的処方が始まったイギリスでは何が行われているのか。日本での取り組みはどうなっているのか。おせっかいだと思われることが実は鍵になるのかもしれないし、各自ができること、興味のあることへ気軽に参加できることが社会的処方となる。

学芸出版社　二二〇〇円

謎解きゲーム理論

浅古泰史著

世界中で増えており、支持もされているように見える独裁国家は、昔と何が違うのか。急に進む政策もあれば、停滞したままの政策もあるが、政治家はどうして平等に動いてくれないのか。なぜこんな愚かな事態になるのかとモヤモヤする謎を、ゲーム理論を使って解き明かす。

キャッチーな装丁と構成だが、内容は本格的。主に解説しているのは社会問題・公共政策のトピックだが、章ごとに挿入されているミステリーをゲーム理論で解くことで、しっかり理解できているか確認しながら読み進めることができる。

この学問を応用することで、より望ましい社会制度が設計できるのではないかという希望を感じさせる。社会を構成する当事者・プレイヤーとして、できることを考えたくなる。

大和書房　一九八〇円

アメリカは自己啓発本でできている

尾崎俊介著　自己啓発本研究者日本一を目指す英米文学者が、様々なジャンルが生み出された背景をアメリカの歴史や社会情勢から読み解く。人生をより良く生きるための「アッパー系自己啓発本」がアメリカと日本でのみ盛んに書かれ読まれている要因や、息子や娘への「手紙系自己啓発本」が母ではなく父からであるのはなぜかなどの分析あり、名著に潜む残念なアドバイスの紹介ありと硬軟織り交ぜたテーマ選びがおもしろい。巻末にはアメリカと日本の自己啓発本の年表があり、現代史を重ねるとアメリカ社会との関係性がよりわかりやすくなる。

平凡社　三〇八〇円

クリエイターワンダーランド

中山淳雄著　本書は、Z世代が作りだすエンターテインメント業界に流れる新しい風を分析する一冊。近年のエンタメ業界におけるキーワードに「創作」が挙げられる。動画投稿サイトの「歌ってみた」やゲーム実況など自らの発信が起点になり様々なカルチャーを形成していく。二次創作の文化があった日本においてTikTokの流行は必然だったのだろうか。筆者の分析を読むとZ世代には垣根というものがないのではないかと感じた。プロとアマ、演者と観客、こうした垣根がいい意味で曖昧になっているのではないだろうか。Z世代市場を注視する現代において本書は必読書になるだろう。マーケターにもおすすめの一冊だ。

日経BP　二二〇〇円

こうして顧客は去っていく

宮下雄治著

著者はリテンションマーケティングとデジタルを活用したマーケティングを研究している國學院大學の経済学部教授。

これまでのマーケティングは新規顧客の獲得を目的にすることばかりが注目されていた。しかし、顧客に長く利用してもらうことがこれからの時代に求められている考え方だと論じる。インターネットが普及した現在では様々なサービスが提供され、手続きが容易になったことから顧客の出入りが激しくなったという。加えてSNS等でのネガティブな情報はフェイクであってもブランド価値を毀損される。顧客が離れる十の原因を取り上げ、顧客をつなぎとめるためにリテンションマーケティングの必要性を訴える。

日本実業出版社　一八七〇円

今月のおすすめ

人文科学

アエタ　灰のなかの未来
大噴火と創造的復興の写真民族誌

清水　展著

ルソン島・ピナトゥボ火山が噴火する前から麓の先住民たちと交流してきた文化人類学者が、彼らが噴火を乗り越えるさまをつぶさにフィールドワークする中で、一人称の文章と大量の写真で綴る「いち先住民族の復興一代記」をものすることとなる。ひいては我々人類の未来へと敷衍するべき新しい苦難への立ち向かい方が、そこには見えてくるのだ。

京都大学学術出版会　三一九〇円

神論　現代一神教神学序説

中田　考著

私たちにとって神とは？　神にとって人間とは？　イスラーム学者が、イスラームの枠をこえて、キリスト教神学、宗教学、ヴィトゲンシュタインなどの哲学、言語論、西欧現代思想、現代物理学を参照して神の概念枠組を再構築する。そしてその過程で新たに現れる「啓示唯一神教神学」を通して、読者は今までの世界認識そのものを新たに越えていくことになるだろう。

作品社　三九六〇円

ハイデガーと現代現象学

池田　喬著

もうすぐ刊行一〇〇年になろうという、ハイデガーの主著『存在と時間』を現代現象学の手法で読み解こうという試み。「現代現象学」とは、現代哲学で争われているテーマや問いを、現象学の立場から受け、現象学に特有な見解や物の見方を提示するものである。もともと現象学の一部でもある『存在と時間』ゆえに、というばかりでなく、二〇世紀最大の哲学書であるからこそ新たな、かつ様々な読みが今世紀に必要とされるのだろう。

勁草書房　三三〇〇円

悪事の心理学
善良な傍観者が悪を生み出す

キャサリン・A・サンダーソン著

「悪事の成立を許す要因には一人の悪人の存在より善良な人々の沈黙がある」と考え、物事における傍観者側の心理メカニズムを紐解いていく一冊。いじめやハラスメント、企業の不正など身近に潜む具体例を挙げ、集団での同調圧力への抵抗策を提示する。

誰もが何時も〝善良な傍観者〟になり得る現実から目を背けずに読了して欲しい。

ディスカヴァー・トゥエンティワン　二四二〇円

追いつめられる教師たち

齋藤　浩著

著者は公立小学校の先生で定年まであと一年。振り返るに大変でも幸せだった思いがあるが、ここ十年の厳しい状況を考えると、後輩のことを思い憂慮する。次々に対応を迫られる管理業務、本来は家庭や個人で考えるべき問題の保護者からの相談、リーダーシップに欠ける管理職等々。著者が求めるのは、そうした実情を知ってもらい、教師たちが、本分である授業等に注力できる、ごく当然の環境が保たれることだ。

草思社　一六五〇円

今月のおすすめ　文学・文芸

ホットプレートと震度四

井上荒野著

九つの食の道具にまつわる短編集。何気ない日常にふと込み上げる感情を、丁寧にすくいとり描いた物語。鉄鍋、ピザカッター、ホットプレート、薪ストーブなど九つの道具それぞれに様々な人の思い出がある。幸福で楽しい思い出、ほろ苦く甘い思い出、捨てたくなるほど辛い思い出まで。

生きていく限り日常は続いていく、思い出をかかえながら私たちは生きていく。幸せな思い出も悲しい思い出も、道具を大事にするように大切に抱きしめながら生きていきたい。気持ちが少し明るくなる一冊。

淡交社　一七六〇円

私の「結婚」について勝手に語らないでください。

クァク・ミンジ著　清水知佐子訳

韓国で話題の非婚ライフ可視化ポッドキャスト「ビホンセ（非婚世）」制作兼進行役のクァク・ミンジさんによるエッセイ。

いつまでたっても結婚しない人にあれこれ言ってくるのは、おとなり韓国も同じ。

結婚する意志はないと伝えると、「そう言いながらいつかは結婚するんだろう」とうんざりするような言葉を投げかけられながらも非婚を貫く彼女の日常が綴られている。

自分と仲良くすることは、自分の取扱いを知ること。意見は違っていても誰かを愛することはできること、そしてこんなふうにここにいるよ、と伝えてくれる彼女の言葉に自然と勇気をもらえる。

あれこれ詮索してくるお節介な人たちも、本当はみな、作者の祖母のように「しあわせかい？」「そういう道もえらべるのかい？」とききたいだけなのかもしれない。

いろんなバリエーションを見ることで、それを見た人は好きに選択していいんだと知ることができるから。

亜紀書房　一七六〇円

spring　スプリング

恩田　陸著

演劇小説『チョコレートコスモス』、音楽小説『蜜蜂と遠雷』に続く、恩田陸芸術小説最新のテーマはバレエ！　主人公は幼い頃から天才的な魅力を放つ「春」という名を持つ少年。八歳で偶然バレエと出会い天命が下ったかのような衝撃を受け、バレエの世界へと飛び込んでいく。彼と運命的な出会いをする人々、友人、家族の目線で、世界的に有名な振付師となる「春」の物語が綴られてゆく。彼を彼せしめているものはなんだったのか。空気、温度、息づかいまでが感じられるような細密なバレエの描写と、「春」の人間的魅力との重なりがもたらす、ゾクゾクするような幸福な瞬間をどうぞ。

筑摩書房　一九八〇円

今月のおすすめ

文庫・新書

小さな町・日日の麵麭（パン）

小山　清著

はじめて小山清の作品にふれた時、ただ日々を生きる人々を描いているだけだと思っていたのに気づけば最後まで読んでしまっている自分にびっくりしたことを覚えている。日常の描写にこんなにも引き込まれた読書体験は初めてで、それまでは手を出すことのなかった作家の作品も「読めば面白いのかもしれない」と読むようになり新しい本と出会うきっかけを作ってくれた。

「小さな町」は戦時下に下谷の竜泉寺町で新聞配達をして過ごしていた主人公の日常が綴られている。新聞配達の管轄に住まう人々はじめ付き合いのあった人々との日々のやりとりが目に浮かぶ描写は思い出話を聞いているような心地よさ。

小山清は太宰治のもとに原稿を持ち込んだことがある。太宰治との交流を描く「風貌」、小山の作品を読んだ太宰が送った葉書に書かれていた一節「周囲を愛して御生活下さい」。小山清の作品に惹かれた身にはあまりにも腑に落ちる言葉で、そんな小山の目を通して描かれる日常を読めるよろこびを噛みしめてしまった。

人々のささやかな日常が集められた短編集。

ちくま文庫　一一〇〇円

ミステリー食事学

日影丈吉著

著者の日影丈吉は昭和二十四年にデビューした小説家でありながら、アテネ・フランセで学び、ホテルの料理人たちにフランス語を教えた料理研究家でもあった。フランスの推理小説も多数翻訳している。その彼が「ミステリマガジン」に連載し、幾度かの書籍化を経て品切れしていたエッセイ集が、この度復刊された。タイトルの通り、ミステリーに登場する食事や毒にまつわる話やそこから発展したミステリー小説や映画の話、料理研究家らしく各国の食事やデザートについての話など、一冊でミステリファンの好奇心を満たす様々な随筆を堪能できる。

ちくま文庫　九九〇円

日本の動物絵画史

金子信久著

鳥獣戯画を始めとして、日本には動物を描いた絵画が歴史的に多数存在する。本書には多数の図版が収録されており、ページをめくる度に「あらかわいい」「これもかわいい」「なんと美しい」と見入ってしまう。なぜ現代の我々が見ても魅力的な動物の絵が日本画にはたくさん存在するのか。

著者によると、これほどまでに色々な動物の絵が描かれているのは、間違いなく日本の絵画の特徴だそうだ。その背景として、動物を畏れたり祈ったり愛おしんだりしてきた歴史がある。画家は人々の動物を描いてほしいという求めに応えるために工夫を凝らしてきた、というわけである。

本書は「日本の動物絵画史」を通して見ることができる一冊となっている。そして「動物絵画史」の本を作れるというのは世界的に見ても稀なことだそうだ。新しい視点から見る日本の絵画の歴史を、素晴らしい動物画とともに楽しみたい。

ＮＨＫ出版新書　一四八五円

今月のおすすめ

芸術

柚木沙弥郎　美しい本の仕事

柚木沙弥郎著　小林真理編著

二〇二四年一月に染色家の柚木沙弥郎（ゆのきさみろう）さんが百一歳で亡くなられた。メディアなどで拝見する、その柔和な姿に親しみを感じていた方も多いのではないだろうか。柚木さんの作品は、そのお人柄から受ける印象と同じように、あたたかくユーモラスなものが多い。本書は、そんな柚木さんの本の仕事を一冊にまとめたものだ。

柚木さんは終戦の翌年から大原美術館に勤務。そこで民藝運動家の柳宗悦等と親交を持つようになり、同じく民藝運動に参加していた、染色家の芹沢銈介に弟子入りしている。

本書には七十歳を過ぎてから始めたという、絵本も多数紹介されている。柚木さんの大胆な色使いとあたたかな絵は、本を読み始める子どもたちの心もきっと掴んで、これからも長く愛され続けるのだろうなと思う。

パイインターナショナル　三〇八〇円

カムイ　半田菜摘写真集

半田菜摘著

ここ最近、知っているようでどこかわからない街の中を熊に追いかけられ逃げ惑う夢をよく見る。夢か、と目が覚めてもしばらく動悸がする。

私たちにとって身近な存在である動物たち。本書は北海道で看護師として働く傍ら野生動物の写真を撮り続ける写真家の第二作目。前作同様、日々いのちと寄り添いながら生きる著者の優しい眼差しと北の大地に力強く生きる動物たちの姿に胸が熱くなる。抱卵中のヨタカを撮影した際の印象的なエピソードは、いかに著者が畏敬の念や感謝を胸に撮影に臨んでいるのかがよくわかる。またそれが写真からもよく伝わってくる。熊や鹿など、動物たちとの関わり方が問題となっている今、「共に生きること」を考えるきっかけにもなり得る一冊。

先の夢の件は夢占い好きな妹に話したところ、「『ゴールデンカムイ』の読み過ぎ」。

日経ナショナルジオグラフィック社　二九七〇円

アリ・アスター監督×ホアキン・フェニックス

最狂コンビの挑戦状

ボーはおそれているが100倍楽しめる！

フリックス編集部編

本書は表題の映画公開に合わせた時事的・雑誌的側面が強い本ではあるが、今得ておきたい内容が詰まった一冊だ。

監督アリ・アスターは表題作が長編三作目。一・二作目は鑑賞者が思わず呻き声を上げるような「嫌」素晴らしいホラー映画（誉め言葉である）だった。今作はより難解でホラーとも少し違う。しかし家族の確執や精神的問題がもたらす不条理等、通底するテーマを読み解くヒントが満載で鑑賞後の掘り下げに最適だ。

ホアキン・フェニックスに関してはご存じの方も多いかもしれないので、映画スタジオA24について。これを読まれている今頃公開されている注目作から配信で観られる名作まで、題名を聞いてこれもA24だったの？と驚くラインナップ。必読です。　ビジネス社　一七六〇円

今月のおすすめ 実用書 地図・旅行書

今さら聞けないひとり暮らしの超基本

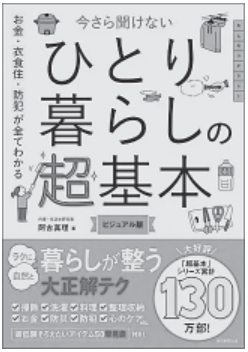
阿古真理著

この春からひとり暮らしを始める新社会人、学生の方も多くいらっしゃるのではないだろうか。かくいう私も若かりし頃、自分好みのカラフルな食器やかわいいティーポットを揃えたり、好きな映画のポスターや当時夢中で集めていたアナログレコードのジャケットを飾るなどインテリアにこだわってみたものだ。初めてのひとり暮らしを満喫していたが、一方でお気に入りの純白のシャツを色移りさせてしまったり失敗も多々あった。そう、ひとり暮らしは楽しい。楽しいけど、難しい。

たとえば「マットレスの洗い方」や、「正しい掃除機のかけ方」など、今さら人に聞けないことも山ほどある。そんなすでにひとり暮らし歴の長い方にこそおススメしたいのが本書。暮らしが整う衣食住のさまざまなテクニックと、暮らしを整える衣食住のアドバイスが満載である。生活していくうえで避けては通れないお金の管理についてもきっちり網羅されている。

くらし文化研究主宰・作家・生活史研究家である著者らしい、戦中戦後～高度成長期における日本の家事の歴史も目から鱗の情報ばかり。暮らしのアップデートにもってこいの一冊である。

朝日新聞出版　一五四〇円



蒙古タンメン中本が本気で考えた辛旨レシピ一〇〇

蒙古タンメン中本監修

辛くて旨～いラーメンで有名な「蒙古タンメン中本」が、おうちで作れる旨辛レシピを刊行。レシピ数はなんと一〇〇種類、その全てが旨辛味という、好きな人にはたまらない一冊だ。

中本が作ったのだから全部ラーメンのレシピなのか?と思われるかもしれないが、さにあらず。基本の旨辛ダレ、旨辛ラー油から生まれるのは、旨辛麻薬卵、辛旨おでん、やみつき辛旨ポテサラ、ナッツが香る辛旨パッタイ……こうして書いているだけでもよだれが出てくるが、メインからつまみまで、何でもござれだ。

おいしさのポイントは、「辛さの中に旨みあり」の黄金バランス、「辛さ三・旨み七」にあるとのこと。前述のタレとラー油に留まらず、鶏そぼろ・牛しぐれ・じゃこ・きのこ・サルサ・レバーペースト（もちろん全て旨辛味）から生まれる旨辛作りおきもすばらしくおいしそうで、眺めているだけで腹が減ってくる。

ぜひ手元において、自分好みの旨辛を追求してほしい。

飛鳥新社　一六五〇円

今月のおすすめ　語学・辞典

世界の視点を読む ニュース英語入門２０２３

倉林秀男［解説］

本書は、週刊英語学習誌の The Japan Times Alpha の記事を厳選し、二〇二三年のニュースを短い英語で六十七本にまとめた本。特徴は大きく分けて二つある。

まず一つ目は、英字新聞の見出しと最初の段落の文章のみを抜粋している点だ。そもそも英字新聞は、重要度の高い順に情報を書き出す構成となっており、最初の段落を読むのに慣れることが完読への第一歩であるからだ。

次に「読解のツボ」という項目である。この項目では、英文を読む際に抑えておきたいポイントと英字新聞に頻出する単語や特有の言い回しを解説している。

ニュース英語を初めて読む方、英字新聞の内容が上手く頭に入ってこない方にお薦めである。

ジャパンタイムズ出版　一三二〇円

読解のための上級英文法

田上芳彦著

英文を細部まで読み解くためと銘打たれたとおり、英文法だけを解説するのではなく、リーディングのための参考書である。一般の文法書とは違い、読解特化の文法辞典の様な使い方が良いだろう。

取り上げられた例文は全て過去の大学入試からの引用で、文末に大学名の記載がある。文法書では補いきれない文例を一つではなく、類例を交えるなど丁寧に説明する。目次と単語での索引もあるので必要な学習項目への行き来もしやすい。

受験生には大学入試でのリーディングセクションの理解を深化させるために、また英文をより理解するための足がかりとしてお手持ちの文法書では物足りなくなった方へもお薦めしたい。

巻末の appendix にある「気づきにくい熟語」に対する見解も面白い。

研究社　二〇九〇円

フランス語 スペイン語 イタリア語 3言語が同時に身につく本

藤田　健著

本書では、それぞれの言語の共通点と独自の特徴がわかるように、文法の説明に力を入れたそうだ。特に三言語の学習で核となる動詞の現在形について、よく使う動詞をとりあげ、簡単な表現を覚えながら文法が学べるような作りになっている。

また、これらの学んだ文法事項に関連して、先人の叡智がつまったことわざを三言語で並べていたり、ちょっとしたコラムも掲載しており、個々のペースで楽しみながら学習できる。仏西伊それぞれの音声ダウンロードの他にことわざに関しては二種類のスピードが収録されているなど、至れり尽くせりの内容だ。

ラテン語やギリシア語の人気も高まっている昨今、興味のある方にはこの本も愉しみながら学べるだろう。

かんき出版　二六四〇円

今月のおすすめ 児童書

ペンギンのクライブ

ヒュー・ルイス＝ジョーンズ文
ベン・サンダース絵
ひたかほのか訳

みんなと同じだから幸せ。

毎日何も起こらなくて安心。

「とんでもない」とペンギンのクライブは、絵本の中から真っ直ぐこちらを見て言うのです。ほかのどこかでくらしたいと思ったり、ほかのだれかになりたいと思ったり。そんな事思ってたの？という驚きと、そりゃそうだよね。という共感の思いで、クライブの幸せを願わずにはいられなくなります。

化学同人　二三一〇円

まよなかのかいじゅう

阿部　結作・絵

真夜中ってとっても不思議。昼間とおなじ場所なのに、世界の姿がガラッと変わってしまったように見える。日差しの下ではお行儀よく直立していた電灯が首を傾げてこっちを覗きこんでいる気がするし、壁の染みがおどろおどろしいイキモノの顔に見えたりする。世界中がかいじゅうの生息地に変化してしまうのだ。

本書に登場する姉妹にも真夜中のかいじゅう現象は降りかかる。

真夜中、大きな音に誘われて踏み込んだ両親の寝室には見慣れないシダ植物が生い茂り、ベッドの上では巨大なかいじゅうが寝息をたてていたのだ。

妹の提案で恐る恐る調査をはじめるふたり。ただ調査が進むにつれてだんだん楽しくなってきて、ついにはふたり揃って怒涛の大騒ぎ！

あれ？　ベッドの上のやつと、この仲良し姉妹、どっちがかいじゅうなのだろう。そんな疑問がわいてくる頃に物語は終盤に差しかかる。用意された結末がまたなんとも微笑ましい。賑やかで鮮やかな真夜中を思いきり楽しめる絵本だ。

徳間書店　一九八〇円

さよならミイラ男

福田隆浩著

真夜中の地震で目が覚める。ひとりきりの夜。母さんは今夜もまだ帰ってきていない。

小学六年生のアキトの日々は家庭にも学校にも身の置き場がなく、八方塞がりだから仕方なく学校に居場所を求める。そんな中、逃げるように訪れた空き教室で偶然見つけた奇妙な存在。それはアキトに声なき声で語りかける。

いじりの範疇を越えているいじめ、母親からのネグレクト、生きる気力を奪う程の貧困。タイトルから連想しにくい、目を背けたくなるようなとてもとても重いテーマが扱われていますが、著者が紡ぎだす、読みやすくて心に溶けていくような言葉がじんわりとしみわたります。淡い光を放つような希望が感じられる、彩り豊かなラストにしびれます。

講談社　一五四〇円

読者から

『地下　ある逃亡』

下池　かおり

中学生か高校生の頃読んだヘルマン・ヘッセの『車輪の下』の主人公と状況は似ているのかもしれないが、本書を読みながら感じたのは希望だった。書名には『逃亡』とあるが、字義通りの逃げる意味ではなく、主人公が自ら選択した生き方だから。中等学校（ギムナジウム）へのいつもの通学のときに持ち続けた疑問をうやむやに消し去らず、考え続けたある朝、反対方向に行くと決断した少年。決断すると行動は早い。会うべくして会う人や場所が現れる。学校では得られなかった本当の教師と思えるポドラハ氏との出会いで彼の日常は大きく変化する。ポドラハ氏の経営する食料品店に雇われることで、今を生きている人々を見、「役に立つように」なることをモットーとするようになる。生きていることを実感するようになる。繰り返し出てくるシェルツハウザーフェルト団地という名前とそこに住まざるを得ない最底辺の住民。時代が変わった今も、どこの国にもあるのではないか。

決定的な瞬間に気持ちを折らず、譲歩もしなかった主人公。周りの大人たちの思惑や無自覚な級友に自分を没してしまわない思考力があったから、年齢には関係なく世界を広げられた主人公。数ページごとに表紙を見返しながら、この小型の本の価値を思った。

（66歳・経理事務）

＊『地下　ある逃亡』
（松籟社・トーマス・ベルンハルト著、今井敦訳・一八七〇円）

古記録に見る〝平安〟『平安京の下級官人』を読む

村山　功一

書店は今、平安・源氏・紫式部……の関連本で溢れている。言わずと知れたＮＨＫ大河ドラマ「光る君へ」にあやかった（失礼）出版企画だろう。それにしてもＮＨＫ大河ドラマの威力は絶大である（視聴率は別として）。

それはさておき、大量の大河関連本の中から私が選んだのは、古記録学の専門家による（倉本一宏『平安の下級官人』講談社現代新書）。帯（腰巻き）に書かれた〈――平和で優雅な時代の過酷な日常〉の一文に強く惹かれたのだ。

私もそうなのだが、平安時代といえば、優雅でなよやかな時代というイメージを持つ。和歌管弦に明け暮れ、恋愛と官位昇進を生き甲斐とする生活、と。「ところが違うんだよ、キミ」と教えてくれるのが本書である。私たちが描く平安のイメージは、上流貴族の世界、それも多分に『源氏物語』が創り出した虚構の世界であると、著者は言う。

貴族から〝下衆（げす）〟と呼ばれる下級官人たち、その下衆に使える下人、雑人。そしてその下が一般庶民であり、国民の大多数を占めている。その実態を、豊富な専門知識を縦横に駆使して読み解く展開は、痛快である。しかも、学者臭を感じさせないくだけた文章は、親しみ易く読んでいて思わず笑ってしまうこと屢々なのだ。もちろん、面白可笑しいだけではない。押さえるところはシッカリと押さえ、余すところがない。

安易な平安イメージを払拭し、人々の営みが息づく歴史の妙を堪能できる一冊である。

（80歳・無職）

＊『平安京の下級官人』
（講談社現代新書・倉本一宏著・一〇三四円）

『書く力　加藤周一の名文に学ぶ』

小池　俊夫

要領よく書くことは、中々難しいものです。後で読み返し、「これ何だっけ？」も珍しくありません。況して、自分の思いや主張を確実に読み手に伝えるように書くのは至難の業です。

谷崎潤一郎や三島由紀夫などの『文章読本』は、手引き書と言うよりも、巨匠の作品の一つとして読んでしまいます。

本書は、「加藤周一の名文に学ぶ」との副題付きです。評論家、小説家の肩書に加え、上智大学や海外の大学の教壇に立った教育者であり、東京帝大医学部出身（内科学）という多能な加藤周一は、戦後日本を代表する知識人で文章の達人です。その文をふんだんに引用しているため、書く技術を超え該博さに刺激もされます。

著者は、編集者として長く加藤に関わり、立命館大学加藤周一現代思想研究センター長も務めた、加藤を最もよく識る人物です。「基礎・実践・応用」の三編二十四章で構成され、ステップを踏むと共に、読み手の必要や力量に応じられる配慮もあります。加藤以外の引用も多く、分かり易く具体的な名文で、引き込まれていきます。

一例紹介です。最近の学生に困惑や混乱が見られる句読点について、「読点は雄弁だ」の章で述べます。加藤の「突然私のなかで美しい人と建築と自然が、一点に集まり、分かち難く融け合ったのは、そのときである。（一部）」を引いた上、本田勝一や大江健三郎も引き、文法的規則ではなく、書く人の裁量に任されるゆえに大切なのだと続き、深く考えさせられます。

ＡＩ時代の今こそ、書くことと真剣に向き合うべき時です。

（七十五歳・元大学教師）

＊『書く力　加藤周一の名文に学ぶ』
（集英社新書・鷲巣力著・一二一〇円）

ATION

丸善
アピタ知立店
☎(0566)91-7170
〔営業時間〕
月～土 10時～21時
日 9時～21時

丸善
アスナル金山店
☎(052)211-9788
〔営業時間〕10時～22時

丸善
ヒルズウォーク徳重店
☎(052)846-2610
〔営業時間〕10時～21時半

丸善
イオンタウン千種店
☎(052)715-7911
〔営業時間〕10時～21時

丸善
豊田 T-FACE 店
☎(0565)41-3282
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
名古屋栄店
☎(052)212-5360
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
名古屋店
☎(052)589-6321
〔営業時間〕10時～21時

丸善
岐 阜 店
☎(058)297-7008
〔営業時間〕10時～21時

丸善
四日市店
☎(059)359-2340
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
滋賀草津店
☎(077)569-5553
〔営業時間〕10時～21時

丸善
京都本店
☎(075)253-1599
〔営業時間〕11時～20時

ジュンク堂書店
松坂屋高槻店
☎(072)686-5300
〔営業時間〕10時～20時

丸善
髙島屋堺店
☎(072)225-0930
〔営業時間〕10時～19時半

丸善
セブンパーク天美店
☎(072)339-7330
〔営業時間〕10時～21時

MARUZEN＆ジュンク堂書店
梅 田 店
☎(06)6292-7383
〔営業時間〕10時～22時

丸善
八尾アリオ店
☎(072)990-0291
〔営業時間〕10時～21時

丸善
髙島屋大阪店
☎(06)6630-6465
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
大阪本店
☎(06)4799-1090
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
難 波 店
☎(06)4396-4771
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
天満橋店
☎(06)6920-3730
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
上本町店
☎(06)6771-1005
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
近鉄あべのハルカス店
☎(06)6626-2151
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
橿 原 店
☎(0744)29-0781
〔営業時間〕10時～18時半

ジュンク堂書店
奈 良 店
☎(0742)36-0801
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
西 宮 店
☎(0798)68-6300
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
芦 屋 店
☎(0797)31-7440
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
神戸住吉店
☎(078)854-5551
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
三宮駅前店
☎(078)252-0777
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
三 宮 店
☎(078)392-1001
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
舞 子 店
☎(078)787-1250
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
明 石 店
☎(078)918-6670
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
姫 路 店
☎(079)221-8280
〔営業時間〕10時～20時

丸善
岡山シンフォニービル店
☎(086)233-4640
〔営業時間〕10時～20時

丸善
さんすて岡山店
☎(086)230-3001
〔営業時間〕10時～20時

丸善
広 島 店
☎(082)504-6210
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
広島駅前店
☎(082)568-3000
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
高 松 店
☎(087)832-0170
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
松 山 店
☎(089)915-0075
〔営業時間〕10時～20時

丸善
博 多 店
☎(092)413-5401
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
福 岡 店
☎(092)738-3322
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
鹿児島店
☎(099)216-8838
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
那 覇 店
☎(098)860-7175
〔営業時間〕10時～21時

INFORM

MARUZEN＆ジュンク堂書店
札幌店
☎(011)223-1911
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
旭川店
☎(0166)26-1120
〔営業時間〕10時～19時半

ジュンク堂書店
弘前中三店
☎(0172)34-3131
〔営業時間〕午前10時～
午後7時

ジュンク堂書店
盛岡店
☎(019)601-6161
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
秋田店
☎(018)884-1370
〔営業時間〕10時～20時

丸善
仙台アエル店
☎(022)264-0151
〔営業時間〕10時～21時
日・祝　10時～20時

ジュンク堂書店
新潟店
☎(025)374-4411
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
郡山店
☎(024)927-0440
〔営業時間〕10時～19時

丸善
水戸京成店
☎(029)302-5071
〔営業時間〕10時～21時

丸善
日立店
☎(0294)32-7401
〔営業時間〕10時～20時

丸善
ジョイホンパーク吉岡店
☎(0279)26-9534
〔営業時間〕9時～20時

丸善
スマーク伊勢崎店
☎(0270)75-4590
〔営業時間〕10時～21時

丸善
丸広百貨店飯能店
☎(042)973-1111
〔営業時間〕10時～19時

丸善
丸広百貨店東松山店
☎(0493)23-1111
〔営業時間〕10時～19時

ジュンク堂書店
大宮髙島屋店
☎(048)640-3111
〔営業時間〕10時～21時

丸善
桶川店
☎(048)789-0011
〔営業時間〕10時～21時

丸善
津田沼店
☎(047)470-8311
〔営業時間〕10時～21時

丸善
舞浜イクスピアリ店
☎(047)305-5808
〔営業時間〕11時～21時
土・日・祝　10時～21時

丸善
ユニモちはら台店
☎(0436)26-7620
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
南船橋店
☎(047)401-0330
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
柏モディ店
☎(04)7168-0215
〔営業時間〕10時半～20時

丸善
丸の内本店
☎(03)5288-8881
〔営業時間〕9時～21時

丸善
日本橋店
☎(03)6214-2001
〔営業時間〕9時半～20時半

丸善
お茶の水店
☎(03)3295-5581
〔営業時間〕
月～土　10時～20時半
日　10時～20時

丸善
多摩センター店
☎(042)355-3220
〔営業時間〕10時～21時

丸善
有明ガーデン店
☎(03)5962-4180
〔営業時間〕10時～21時

丸善
有明ワンザ店
☎(03)5530-5701
〔営業時間〕10時～19時半

丸善
メトロ・エム後楽園店
☎(03)5684-5130
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
池袋本店
☎(03)5956-6111
〔営業時間〕10時～22時

ジュンク堂書店
プレスセンター店
☎(03)3502-2600
〔営業時間〕11時～20時

ジュンク堂書店
大泉学園店
☎(03)5947-3955
〔営業時間〕10時～22時

ジュンク堂書店
吉祥寺店
☎(0422)28-5333
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
立川髙島屋店
☎(042)512-9910
〔営業時間〕10時～21時

丸善
横浜みなとみらい店
☎(045)323-9660
〔営業時間〕11時～20時

丸善
ラゾーナ川崎店
☎(044)520-1869
〔営業時間〕10時～22時

丸善
日吉東急アベニュー店
☎(045)594-8960
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
藤沢店
☎(0466)52-1211
〔営業時間〕10時～21時

丸善
松本店
☎(0263)31-8171
〔営業時間〕10時～20時

MARUZEN＆ジュンク堂書店
新静岡店
☎(054)275-2777
〔営業時間〕10時～21時

丸善
名古屋本店
☎(052)238-0320
〔営業時間〕10時～21時

営業時間は変更する場合がございます。ご了承ください。
定休日については、お手数をおかけしますが弊社 HP または直接各店までお問い合わせ下さい。

投稿募集

☆読者の皆様の投稿を募集しています。最近読まれた本の感想文、本にまつわるエッセイ、など本に関するもの。最近読んでおもしろかった本、感動した本、考えさせられた本を教えて下さい。四〇〇字～六〇〇字程度で、おすすめの本のタイトル、出版社、住所、氏名（ペンネーム可）、年齢、職業を明記の上、お送り下さい。掲載分には二千円の図書カードを差し上げます。なお、原稿はお返しいたしませんのでご了承下さい。

☆尚、本誌掲載と同時に、ホームページにも掲載させていただきます。

〒171-0022 東京都豊島区南池袋二―一五―五
丸善ジュンク堂書店「書標」編集室係
TEL〇三―五九五六―六一一一

いつも「書標」をご愛読いただきましてありがとうございます。本誌定期購読料は以下の通りです。

定期購読料　年間一六八〇円（送料込）
現金書留もしくは一四〇円切手十二枚で

お申し込み先

〒171-0022 東京都豊島区南池袋二―一五―五
丸善ジュンク堂書店特急便係
TEL〇三―五九五六―六一一一
FAX〇三―五九五六―六一〇〇

PC・スマートフォンから
https://www.junkudo.co.jp/
QR コード

ブックブレスユー

編集後記

弊誌三月号に誤記がございました。

特集「米国よ、君はいずこへ――中山俊宏さんを偲びつつ――」の文中にある、中山俊宏さんの没年は、二〇二〇年ではなく二〇二二年です。ご不快の念をおかけし、誠に申し訳ございません。訂正してお詫び申し上げます。（緒）

本屋うらはなし

ある本屋の三月

様々な行動制限が解除されて早一年が経ちました。コロナ以前と以降で変わったこと・変わらなかったことは世の中たくさんありますが、本屋の現場でも、売れるようになったもの・以前ほど売れなくなったもの、売れて欲しいもの……、お客様の行動変容をあれこれ予想しながらの業務は毎日が手探りでした。ようやく何かがみえてきたような気がするこの春、今回は地方の本屋の三月の様子をつれづれなるままにご紹介したいと思います。

一日、基本的にフェアが月替わりで一斉に入れ替わります。当日の予定を確認しながら各ジャンルで入れ替えの打ち合わせをし、日々の業務の合間に進む作業。個人的にはこの時間が一ヶ月で一番好きです。普段は棚にない本や定位置の書棚で背表紙だけを見せている本がフェアになると急に主役に返り咲き、ジャンルや出版社など関係なく並ぶ様子にわくわくが止まりません。暖かくなったら薄着になって体が気になるからダイエット本！　新社会人に向けてのビジネス入門書！　すきま時間のお供にして欲しいから短編アンソロジーを集めたい！　春の散歩のお供に植物のポケット図鑑を！　今はパステルカラーの文具がおすすめ！などなど、お客様の生活が少しでも豊かになるようにとの願いを込めて仕入れた本が並ぶのがフェアです。大々的なフェア、こっそりと棚の中で展開されるフェアなど様々な模様替えは店員同士でも話題になる楽しみです。

二日、ハイヒール・モモコさんのサイン&写メ会開催。サイン会は三年ぶり。ご予約のレジュメ作りや告知の開始など用意段階から不慣れな業務にてんてこ舞いでした。出版社の担当者やテナントビルの担当者とも何回も打ち合わせをしました。店舗内にサイン会スペースがないため、館のイベントスペースを借りましたが、前日の会場設営や当日の人員整理に駆り出された方々など、店員以外多くの手助けをいただき、大盛況なサイン会となりました。サインをもらった本を持つお客様の笑顔が本当にまぶしく、予約対応・告知の作成・当日の看板作成・会場の飾り付け・店内でのお客様対応など店舗の店員皆の自然な協力体制も本当に嬉しく、ご来店いただいたお客様を始め、沢山の人に心から感謝した一日でした。

三日、休憩時間に福島聡『明日、ぼくは店の棚からヘイト本を外せるだろうか』を読了。誰かを傷つける可能性のある本を販売することに対して、ずっと感じていたもどかしさがありました。この問題に真摯に向き合う一冊に勇気付けられ、多くのお客様に様々な本を手に取ってもらう努力をしよう、と改めて気持ちが奮い立ちました。読了後の接客は自分で言うのも何ですが、勇ましく、いい笑顔だったと思います。

三月の様子を書くつもりが紙面は三日間で埋まってしまいました。文章に書ききれないほどの日々を過ごしていることを実感しながら、本日も元気に店内巡回中です。　（松）

「書　標　ほんのしるべ」　第544号
編集・発行人　中　川　清　貴
発　行　所　㈱丸善ジュンク堂書店　〒160-0008　東京都新宿区四谷三栄町十一番二十四号　ニューフィールドビルディング
印　刷　所　㈱七　旺　社　〒653-0012　神戸市長田区二番町四丁目二十七番地
二〇二四年四月五日発行　頒価五十円（本体四十六円）

「書標　ほんのしるべ」昭和61年7月15日第三種郵便物認可
2024年4月5日発行（毎月1回5日発行　通巻第544号）

MARUZEN JUNKUDO × サマリーポケット

預けた本は一覧で管理。タイトルや作者もデータ登録！

文庫本なら1箱に130冊入ります！
サイズ：幅44cm × 奥行33cm × 高さ24cm

丸善ジュンク堂書店のお客様限定プラン

3箱保管プラン ｜ 通常月額 1,485円 ····▸ 最大30%おトク 990円

5箱保管プラン ｜ 通常月額 2,475円 ····▸ 最大35%おトク 1,540円

詳細はこちらから
https://spkt.jp/maruzen

※ バーコードを読み込んで画像やタイトルをデータ登録します。バーコードがないものや読み取ることができないものは、適宜個別に撮影します。
※ 価格は全て税込表示です。
※ 本プランの対象となるのは、「サマリーポケット」に新規登録される方に限ります。
※ 本プランはサービス利用開始後24ヶ月間有効です。（翌月以降は通常料金となります。）

ご利用方法は簡単4ステップ

1
専用サイトで申し込み

2
届いたボックスに
本を詰めて送るだけ

3
預けたものは
PC・スマホで管理

4
使いたい時、最短翌日に
取り出せる

本の保管場所に悩む、すべての方へ

ジュンク堂書店
淳久堂書店

MARUZEN

頒価 五十円（本体 四十六円）